希望学プロジェクト特別寄稿　アンケート調査にみる釜石の希望（第３回）

Ｕターンのタイミングとネットワーク資源

石倉義博（早稲田大学理工学術院）

Profile いしくら・よしひろ

1970年生まれ。早稲田大学理工学術院 准教授。専門は社会意識論。主な論文に「挫折と幸福、希望を語るということ」玄田有史（編）『希望学』中公新書ラクレ、「大衆化のなかの情報社会論」『社会科学研究』54（４）など。

地域移動とＵターン

連載３回目となる今回は、Ｕターンという人生の選択と、それに先んじて起きる釜石からの他出について、同窓会調査（詳細は『広報かまいし』10月号参照）のデータから世代による変化を探ってみたい。

高校卒業後にどのような進路を選択するかによって、卒業者は大きく３つのグループに分かれる。すなわち、釜石に残って就職する者、就職先を釜石外に求めて出ていく者、他地域の学校に進学する者、である。

高校卒業時点で釜石に残るのは、進学せず、釜石で就職先を見つけたグループであるが、その人たちも転職や結婚などを契機に釜石を出る場合もある。逆に、他出した者が卒業や転職、結婚、家の継承等の出来事を契機に、釜石にＵターンする場合もある。

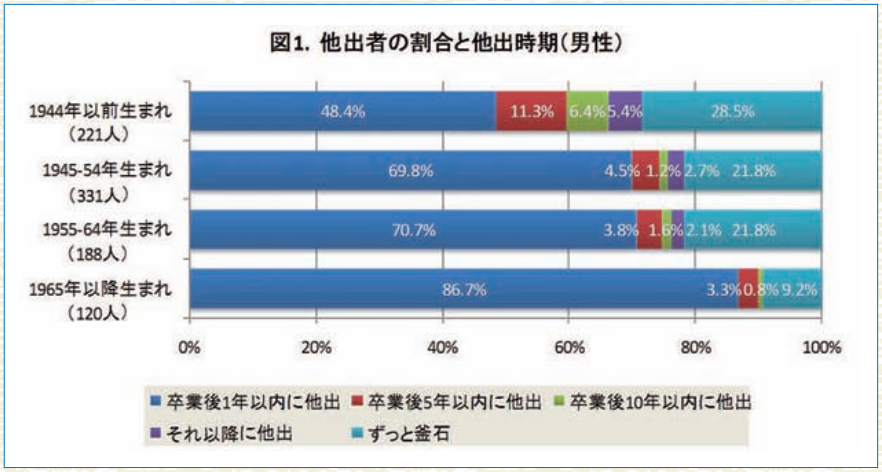
釜石外への他出、またＵターンという行動がいつ発生するかは、釜石内の産業の状況や進学率の変化などの影響を受けるため、外に出る傾向、戻って来る傾向、いずれも世代によって大きく異なってくる。

本稿では、釜石から出るタイミングと、釜石にＵターンするタイミングに注目してみる。

釜石を出るタイミング

男性の他出について調査の結果を見ると（図１を参照）、１９４４年以前生まれの世代では、高校卒業時点で釜石に残るか、外に出るかの割合はおよそ半々である。ただし、その後製鐵所の縮小とそれに伴うさまざまな変化の結果として、釜石に住み続ける人は卒業生の３割弱にまで減少する。この次の世代、すなわち釜石の大幅な人口減の時代に高校を卒業した１９４５～１９５４年生まれ、１９５５～１９６４年生まれの世代は、大学進学率の向上、また市内での高卒者の就職口の減少から、卒業後１年以内に７割程度が他出している。最後の１９６５～１９７７年生まれの世代は９割が卒業後５年以内に釜石を出る。

なお詳細は割愛するが、女性の場合は結婚に伴う他出という特有の現象があり、他出する割合は多くの世代で男性よりも高いが、最も若い１９６５～１９７７年生まれの世代だけは、ずっと釜石に住んでいる人の割合が17・5％と、男性の９・２％という数字を大きく上回っている。



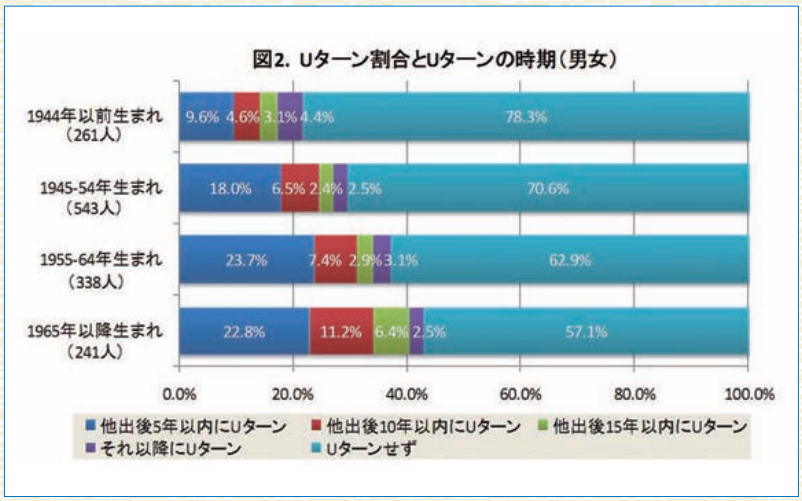
Uターンはどの時期に起きるのか

現在釜石に住んでいる人の3割弱は外から移り住んだ人であり、また約4割がUターン経験者である（「市民意識調査」より、『広報かまいし』10月号参照）。

同窓会調査のデータからは、釜石にUターンする傾向は図2のように若い世代ほど高まっていることが分かる。ただし、若い世代ほど外に出る人の割合も増えており、また子どもの数自体が減ってきていることもあって、市内にいる方々にはUターンが増えているという実感は少ないかもしれない。

では、Uターンした人たちはいつ釜石に帰ってきたのであろうか。進学や就職のように皆が同時期に経験する出来事とは違い、Uターンは比較的長期にわたって起きるが、いずれの世代でもピークは他出後5年以内であり、それ以降は鈍化、他出後10年を超えてのUターンは少数である。

世代別の特徴をみると、1944年以前生まれの世代は外に出る割合が最も低いが、同時にUターンする割合も最も少ない。またこの世代には、他出先での引退後に釜石に終の棲家を求めた人も若干だが含まれている。続く1945～1954年生まれ、1955～1964年生まれの世代では進学のために他出した人が多いが、卒業後にUターンするケースも多く、Uターンのピークは早まっている。最後の1965～1977年生まれは他出する割合が9割と最も高い世代であるが、同時にUターンも活発である。この世代は他出後10年を超えてもUターンが続き、最終的に釜石に帰ってきた人の割合は最も高くなっている。若い世代には、いったんは外に出るが学業や経験を積んで戻って来るというパターンが定着しているといえるだろう。



Uターンの選択と家族関係

本人の家族形成はUターンを考える上で重要な要素である。Uターン経験者のうち、男女ともに三分の二は未婚のうちにUターンしている。つまりUターンという生活の転換には、独身という身軽さが必要と考えられる。家庭を構えた後では配偶者や子どもの意向もあり、本人の希望だけで決めることは難しくなる。そのため結婚適齢期となる30歳前後を境にしてUターンし難くなるのだと考えられる。若い世代のUターン期間が延びていることも、昨今の晩婚化により独身の期間が延びたためといえるだろう。

家族との関係はUターンを促す要因としても働く。多くは独身であるUターン直後の者にとって、親との同居は生活基盤を共有できるため、新生活への準備を円滑に行う重要な資源となりうる。そのため高校時代の住居が持家かどうかによって、Uターンする割合は大きく異なる。1955年以降生まれの場合、釜石に持家のある者のUターン割合が40％を超えるのに対し、そうでない者は25％程度にとどまる。また持家率は年々上昇しており、このこともUターンの増加に影響していると考えられる。

Uターンとネットワーク

では、Uターンをどのように考えるべきだろうか。地域の立場からすれば、外で経験を積んだ人々が釜石に帰ってくることは望ましいことだろう。また親の立場であれば、子どもに近くで暮らしてほしいという気持ちと、子どもが力を発揮できる場所で活躍してほしいという気持ちが相半ばするところではないだろうか。もちろん釜石で自分の子どもが活躍するというのが一番だろうが、なかなか仕事と希望のマッチングは難しい。また逆に、希望の仕事が釜石にあるのに気付かないという別のミスマッチもあるだろう。

どのような選択をするにせよ、当事者が後悔をしない選択を行うためには、十分な情報が必要となる。そのためには外に出た人たちと釜石とが、絶えず仕事や住居など、釜石に関する情報を共有できるようなネットワークを保持していくことが重要である。インターネットでも公開されているこの『広報かまいし』もネットワーク形成の糧となるものであるし、また釜石はまゆり会や、今回の調査でご協力いただいた市内の高校の同窓会組織はいずれも熱心に活動しておられ、有力なネットワーク資源である。これら既存のネットワーク間の連携をいっそう強めることで、よりよいUターン選択を行うことや、またUターンしない場合でも外からの応援団として、外と内とのつながりをいっそう有効に活用していくことが可能となるだろう。